君にはココアを、僕には愛を。/銀魂/沖神

槻夜 七瀬

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
君にはココアを、僕には愛を。／銀魂／沖神

【Ｎコード】
Ｎ３６４５Ｆ

【作者名】
槻夜　七瀬

【あらすじ】
肌寒い中、買い出しを頼まれた神楽は文句をぶつぶつ言いながら歩いていた。温かい飲み物が欲しくなったとき、通りかかった公園にいたのは……

（前書き）

ＰＶ１０００突破ありがとうございます！

「あー…う゛ー…」

喉をさすりながら、神楽は声を出している。

時は秋から冬に差しかかる頃。

喉や肌が乾燥してくる、風邪を引きやすい季節だろう。

「っ…こほこほ……う゛ー、喉が痛いネ」

こういうときは家で温かい飲み物でも飲んでゆっくりと休むのがベ

ストだ。

だが、今の彼女にはそうできない理由がある。

「チクショーあの天然パーマ、こんな寒いときに幼気な少女をパシるだなんて、本当にろくでなしネ」

鼻の頭を赤く染めながら、神楽は頼まれた安売りのトイレットペーパーと酢昆布を一つの袋に入れて抱えている。

いつも通っている公園を目の前にした。

流石に、今は遊んでいく気にはなれない。

マフラーを巻き、昨日よりも少し厚着をして駆け回る子供達を見ていると、何となく遊ぶ気になれない自分に嫌気が差し、ふて腐れた顔になる。

通り過ぎる瞬間に、溜め息と共に呟いた。

「あー寒い」

「あー寒ィ」

ん？と立ち止まる。

今、声が二重にならなかったか？

ゆっくりと公園の前まで戻る。

白い息を吐き出しながら駆け回る子供の中に、一人。

見慣れたベンチに座った、見慣れた男がいる。

「あ」

ああ、また二重になった。

嫌気を感じながら、目を逸らした。

「何でィ、チャイナ？　挨拶もしねーで」

「……する必要ないダロ。いつも通りネ」

「は。まぁ、確かに」

マフラーも手袋もなしで、ベンチに堂々と座る彼の吐息は、やはり白かった。

「寒くないアルか？」

声を掛けてみる。
こんなに寒いと、喧嘩する気にもなれない。

「寒くないように見えるんですかィ？」

笑ってるんだか笑ってないんだか解らない表情だ。

「聞き返すなヨ。訊いてるのはこっちネ」

「そりゃあすいませんねィ。…まァ寒いっちゃあ寒いですけどね、ほら、これ」

「あ」

ひょい、と取りだしたのはココアだった。

「ずるいネ！　ちょ、それ寄越すヨロシ！」

「いや、ずるいの意味が解らなくなってくるぜ、それ聞いてると」

「こっちなんかなァ、この寒い中で安売りの便所の紙買ってこいって言われてすっげぇ腹立ってるんだヨ！」

「はァ？　それ俺に全く関係ないだろィ？」

「ええい、じゃあもうこれと交換で良いアル！」

そう言って差し出したのは小さな箱に入った酢昆布だ。

「ココアと酢昆布ってアンタ……」

「充分ダロ！？　つーかもうすぐハロウィンだろーが、こんな時くらい大目に見ろヨ！」

「いやいやいや、しかも一箱って」

「おま、まだ何か文句あるアルか！？」

ふと、沖田は言い返すのを止めた。

にやりと怪しい笑みを浮かべて、神楽を見た。

「良いぜィ、これ、やるよ」

「！　ほ、本当アルか？」

「ああ」

ぱあっと輝かしい笑顔を見せて、ココアを受け取る。

「あったかいネ……」

幸せそうな笑顔を見ていると思惑を忘れてしまいそうになる。

神楽はココアを一口、口に含んだ。

「あったまるアル！　ハロウィンにはピッタリネ！」

「そりゃあ良かった」

もう一度ココアを飲み込むのを見届けてから、沖田はニヤッと笑った。

「……ま、消費期限とっくに過ぎたヤツを温めただけですけどねィ」

「!?」

驚きで噎せ返る神楽を見て、思わず笑いが零れた。

「おまッ……人に何てモノ飲ませてんだヨ!?」

「何って、ココアだぜィ？」

「そーじゃねぇヨ！　お前、人としてそれで良いのかヨ！？」

「まぁまぁ、そう怒るなって。ほれ、まだ酢昆布食ってねぇから、ココアと交換」

「交換どころじゃないアル！　全然足りないけど、慰謝料代わりの酢昆布ネ！」

「へいへい」

「覚えとけヨ！！」

怒った神楽は、飲みかけのココアをダンッとベンチに置いて、顔を真っ赤にしながら走り去った。

そんな彼女の背中を見ながらクスクス笑い、彼女の飲みかけのココアを手に取った。

「……消費期限とか、信じる方が馬鹿だろィ」

呟いて、グビッと一気に飲む。

口の中に、ほろ苦い香りと甘さが広がる。

彼女と同じ気持ちを感じているのだと思うと、それが無性に嬉しく感じた。

そんな自分が滑稽で、また笑いが込み上げる。

「ああ、あったまるねィ」

この続きの言葉を、二人同時に呟いたことは言うまでもない。

「ハッピーハロウィン」

「おい、総悟！　ハロウィンのお菓子、持ってきたぞ」

「…ああ、近藤さん…すみません、俺もうお菓子は良いです」

「ええっ！？　だって、ハロウィンって言ったらお菓子だろ？　総悟もほしいかなと思って…。そっか、嫌いだったのか……」

「いや、嫌いじゃなくてですね」

「じゃあ何なんだ？　具合でも悪いのか？」

沖田は満面の笑みを浮かべた。

「もう、とびきり甘いのを貰いましたから」

終

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3645f/

君にはココアを、僕には愛を。/銀魂/沖神

2010年10月9日07時09分発行